

地球物理学と私

加藤 進 (中四四回)



一 太平洋戦争時の中学生生活

私は一九四一年春、県立川越中学校(略して川中)に入学した。戦時色は、濃くなっていった。中学校の制服は、カーキ色の国防色に代わり、学制帽は戦帽になった。従来の肩からかけるかばんは、背囊になった。足にはゲートルを巻く。軍事教練も、重要な中学校の課日になっていた。だが、四年生夏までは、授業は普通に行われた。

入学した年の十二月、太平洋戦争が勃発した。開戦の朝、寝坊をした私が校門を入ると、沢山の生徒が校庭に向かって走っていた。異常な雰囲気、に包まれていたのに気が付いたが、全くチンプンカンプンだった。この私を見つけた配属将校が、怒鳴りつけた。

「今日はどんな日なのか」

この問いに、私はとっさの機転を働かせ

「すまないであります」と言う

「よし、すぐに校庭に集合しろ」と怒鳴られた。すぐに校庭に向か

って走った。そこで校長先生の話を聞き、初めて開戦を知ったのだ。

しかし、やがて、スポーツでは、ホームランなど敵国語である英語使用は禁止されたが、川中では、英語の授業は、むしろ奨励されていたと思う。米英の植民地を占領すれば、英語の知識が不可欠になると、言われたことを憶えている。当時の川中はこんなユニークな見識を持っていた。簡単な英会話も授業に取り入れられ、この授業に使うため、教科書の各レッスンに載っている挿し絵の拡大図作成が、絵画部員の私に依頼された。

「ムチ」のニックネームと呼ばれた先生が発音する "Altogether" を、聞き取るのに苦労したことを記憶している。今思い出すと、この時の先生は、他の先生と違って、英語の発音が正しく、日本語的発音でなかったのが、分かりにくかったのだらう。

一九四四年から米軍のB29による本土爆撃が始まった。この年、中学校生活は急変した。夏から、四、五年生全員が軍需工場に動員された。勉強など、殆ど出来ない時代の到来だ。私達生徒の行く先は朝霞にある被服廠で、仕事は重労働であった。

大きな木箱に詰められた靴は、一箱約三〇kg、鉄バンドで締められた綿の巨塊は一個六〇kg。これらを、肩に担いで、貨車、倉庫にきちんと積み上げるのだ。この人夫作業は、はじめは若い体でもこたえるほどきつい。でも、一ヶ月後には、これに耐えるように、体

が変形してきた。やがて、楽しい労働になる。肉体労働は嫌いではなかった。

仕事の能率を上げるために、工場側の要請で、一日の仕事量を決めて、働く時間の長短にはかまわないと決めた。こう決まると、わが班は頑丈な体の生徒ばかりなので、すごく早く仕事を終了させた。その後は、決められた終了時まで、勝手に休憩を楽しんで良かった。

ところが、そこに現れた先生は、いきなり班長の私を殴った。そして、何の説明も釈明も聞かず立ち去った。軍隊とは、こんなものかもしれないと思った。

入学当時の生徒と先生の間にあつた信頼と親しみが、戦争の激化と共に、失われて行くように思えた。勿論、すべての先生が暴力教師ではなかった。

一方、同じ作業班に属し、毎日のように、長い時間、助け合つて働いた生徒間には、特別に仲間の親しみが生まれた。これは兵隊が持った戦友感情に似ていたかもしれない。

敗戦を期に、川中は川高に変わつた。このわが母校は最近、創立百年の節目を迎えた。思うに、この百年の歴史には明暗両時期があつた。私が過ごした時期が暗い時期であり、それ以前と以後は明るい時期と言えそう。川高の生徒たちの青春が、今後も、ずっと明るいものであつて欲しい。

二 高等学校、大学生生活

から地球物理学への生活

旧制浦和高等学校入学から、京

都大学を卒業するまでの時期はまさに「戦後の時代」である。私の戦後とは、あの戦争中、きわめて制限されていた勉強と遊びの生活を取り返すように、空腹に耐えながら、夢中に生きた時代だ。

高等学校時代に得た大きな収穫は、電磁気学のすばらしい講義を受けたことである。

日本の敗戦が近づいた昭和二十年初夏、我々生徒は、昼間、軍事情場で工員として働かされた。夕方、学生寮に戻り、夕食を済ませた後、二、三時間、講義がおこなわれた。しかし、この劣悪の環境で受けた講義にはすばらしいものがあった。そのひとつが向坂教授の電磁気学だ。東大物理学科出身で、浦和高等学校ではわずか二名の理学博士号を持つ教授の一人である。小柄で、はげ頭のこの先生が、講義中には大きく見えたのを覚えている。そして終戦まで、この先生の笑った顔を見たことはなかった、と級友達が噂していた。

向坂先生が、こんなにひどい教育環境で、なぜ電磁気学を熱心に教える気持ちになられたか。それは軍人が戦地で戦利品として得たレーダーを使う能力に欠けていると知ったからだそう。そしてこれは兵士が、電磁気学を理解していかないためであるからと考え、われわれ理科の生徒を、そんな無能力のまま、戦争に参加させたくないと思われた、こう誰からともなく聞かされた。

私はこの先生の気持ちを抵抗なしに受け入れたと思うが、はつきり記憶していない。ただ、私にとつて、これが電磁気学に興味を持つ

つた理由ではない。ただ先生の講義のすばらしさから、電磁気学への興味が始まった。このすばらしい向坂先生の講義は、戦後、時には先生の冗談や笑いを交えた楽しい講義に変わった。数学の基礎が十分ではない学生に、電磁場方程式をあれほどうまく理解させた先生の腕前には、今でも感心している。

私が大学で地球電磁気学を専攻したこと、さらに研究者になり、理論から実験に変わり、大気観測大型レーダーを建設したことが、向坂先生のすばらしい電磁気学の講義に惹かれたことと、意識のどこかで繋がっていると感じている。

さて一九四六年春、京都大学理学部地球物理学科に入学した。東海道線の電化が、まだ復旧していない時代で、夜行で、東京から京都まで十数時間かかった。京都に着くと、はるばる来たとの思いがする旅であった。だが、京都の街はすばらしい。太平洋戦争の空襲の跡もなく、静かで落ち着いたたたずまいに、感激した。下宿探しにも、さほど苦労はしなかった。

ところで、どうして地球物理学が私を選んだかは、それ程、自分でも、はつきりしない。私は中学校の三年生の頃、科学者になることに憧れた。化学の周期律表に魅せられ、始めは化学者になりたかつた。しかし、数学がもつと使えそうに見えた物理学が、より魅力的になってきた。浦高では同級生は専ら東大工学部を目指したが、私は学者になる積もりであったから、理学部に行きたいと、考えていたことは、確かだ。そして、やはり